

保育施設の選択要因となる情報入手法

A means of collecting data on factors in selecting childcare facilities

関 容子

Yoko Seki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード : 入手法

Key words : how to obtain it

1. 研究目的

(1) 本研究の背景

少子化が社会問題になっているにも関わらず、夫婦共働きで保育を必要とする家庭が増えている。匿名の「保育園落ちた」のブログを契機に、保育所の待機児童問題は社会関心事となり、国は待機児童解消に向けて緊急施策を打ち出した。保育士配置の弾力化や資格要件の緩和、定員超過入園の柔軟な実施など量の拡大が叫ばれている。『子ども・子育て支援新制度』がスタートし、保育施設の形態や事業内容が多様化し、選択の幅が広がる一方、施設が置かれた環境や設備、特色ある保育内容や基本保育料以外にかかる上乗せ徴収等、施設による違いが大きくなり、施設選択を委ねられる保護者の判断はこれまで以上に難しくなっている。堤 (2014) は、幼児期における最も大きな家族の教育選択は、保育所/幼稚園の選択にある。と述べ、家族がどのようなサービスを選択するのか、またその選択はどのような社会環境によって制約されるのか、といった実証的な分析はこれまで蓄積されてこなかった、と指摘している。

(堤 2015) 保護者が入所させたいと思う施設情報に出会い、内容を理解し、入所を決断するまでには、子どもの生活の場となる保育施設での成長をイメージすることが必要である。2015年度から、給付制度により国や市町村が定めた基準をクリアした認可施設事業として、認可保育所、認定こども園、幼稚園 (新制度に移行した)、小規模保育施設、家庭的保育施設、事業所内保育施設があるが、制度を理解し、多様化したそれぞれの施設で実施される保育サービスを把握し、各家庭にあった施設を選択することは、子育て家庭にあって容易なことではない。

(2) 研究の目的

2016年4月から5月にかけて実施された厚生労働省の「保活」の実態に関する調査において、量的調査結果は出ているが、具体的に保護者がどのような動きをしたのかについては追うことができない。起きている時間のほとんどを保育施設で過ごすことにもなる子どもたちにとって、生活時間の積み重ねによる、その後の育ちの影響は大きいと考えられる。保護者の利便性や経済的理由、子どもに対する親の期待だけでなく、子どもにとっても保護者にとっても良い結果につながる情報を獲得し、選択につなげる必要がある。これから子どもを保育施設に入れたと考えている人が、どこでどのような情報を収集し、何に魅力を感じ、どのようなことを決め手に施設を選択していくのか、いくつかのケースについて、その過程を追い、具体的に保育施設選択についてどのように思いを巡らせる人々がいるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究実施内容

(1) 方法

半構造化インタビューを実施。

インタビュー項目は以下の43項目である。

1 何人家族 2 居住地 3 子どもの数 4 両親の年齢
5 父親の職内容 6 母親の職内容 (職経験) 7 母親の現在の状況 (就業中、産休、育休等) 8 仕事の再開時期 (入所を機に仕事に就きたいと思うか) 9 具体的な時期 10 仕事を始める理由 11 普段家にいる人 (子どもと母親だけか) 12 父親の帰宅時間 13 父親と子どもについての会話があるか 14 いつから、どのような園に行かせるか話したことがあるか 15 入所に関する祖父母の意見があるか 16 入所

時期は決まっているか (いつから入所させたか) 17 それはなぜか 18 どんな園か (決まっている場合は、以前から考えていたような園か) 19 入所させたい園のイメージはどのような感じか (決まっている場合、以前から思い描いていたイメージにあっているか) 20 入所を考えている園に見学に行ったことがあるか (子育て支援等を利用したことがあるか) 21 なぜ見学したのか 22 見学した施設情報はどこから入手したのか 23 どうしてその入手法が良いと思ったのか 24 一番信頼できる入手法は何か 25 一番役立つ情報は何か 26 それはなぜか 27 どのようなところで、どのようなかたちで情報が入手できたら役立つと思うか 28 どのようなことについて、わかりやすい情報がほしいか 29 保育施設について説明会が開催されたら参加したいと思うか (何について聞きたいか、どんな場所でどのような形態を望むか) 30 説明会の情報はどのように発信されると入手しやすいか 31 どうしてこの園に決めたいと思ったのか (一番の決め手は何か、二番目は何か) 32 これからどう育てていきたいか (どんな子どもになってほしいか) 33 ご主人、祖父母とどんな子どもに育ててほしいか話したことがあるか 34 行かせたいと思っている園ではどのような経験ができると思うか(今の園でどのような経験をしているか、入所前に期待し望んでいたことか)35 園の気に入っているところ、こんなはずではなかったところはどのようなことか、どのような場面で感じるか 36 それはなぜか 37 良い園、つとはどのようなところだと思うか 38 子どもを行かせたいと思う時どのようなことにこだわりたいか 39 小学校へ行くとき (卒園時) どんな子どもになってほしいか 40 それはどうしてか 41 入所させたい園を探すとき、卒園時の子どもをイメージしたか 42 乳幼児期に経験したことが、今後の子どもの成長に影響があると思うか (どんなところに影響があると思うか)43 今行かせたい(行っている)園は、期待している経験ができる園だと思うか

(2) インタビュー対象

知人やその友人をとおして、研究目的を理解し、協力してもらえる保護者を選定する。

これから子どもを保育施設に入所させたいと考えている保護者 7 名と、現在子どもが保育施設に在園中の保護者 3 名の計 10 名にインタビューを依頼する。

- ・地域
群馬県在住 7 名、埼玉県在住 2 名、東京都在住 1 名の計 10 名
- ・これから入所を考えている保護者 7 名のうち、5 名は群馬県在住、1 名は埼玉県在住、あと 1 名は東京在住。
- ・現在子どもが保育施設に在園中の保護者 3 名のうち 2 名は群馬県在住で、公立保育所と地方裁量型認定こども園、1 名は埼玉県在住で公立保育所と小規模保育施設を利用している。
- ・インタビュー期間及び時間
平成 28 年 6 月 3 日から 8 月 14 日に実施し、インタビュー時間は短い人で 30 分、長い人で 120 分、平均 78.6 分であった。

3. まとめと今後の課題

(1) インタビューの整理

表 1 では、どこから情報を入手し、何を決め手に選択に至るのか、現在入所中の保護者 3 名 (ABC) と、これから入所予定の 7 名 (DEFGHIJ) のインタビューから、「施設の情報はどこから入手したか」、「どうしてこの方法で入手したか」、「一番信頼できる情報は何か」、「一番役立つ情報は何か」、「何を決め手に選択するか」、「二番目となる決め手は何か」について抜粋しまとめた。

図 1 では、情報入手から申し込みまでの流れを図に表すことで、情報入手から決断に至る過程で影響があると考えられる事柄や関係機関、方法について保護者の動きを追いながら、その関係性を見た。まず、情報入手の取っ掛かりとなる項目として次のことが挙げられる。生活圏内に施設がある (自宅近くにある)、家族からの情報提供、保護者の出身園であったという自身の経験、地域の回覧板の情報、保護者間の情報網(保護者が所属する団体での情報)、母子手帳配布時、健康診断時に配布されるチラシによる情報、保護者の体調不良による入所の必要性、第 2 子出産に伴う支援の必要性、自身で施設について気になり調べてみたいと思った。

・生活圏内に施設がある場合、保護者の出身園が取っ掛かりとなる場合は、施設の存在を知っており、その施設をはじめ近くの他の園についてもネットで調べ、市役所へ行き、施設の一覧等が載った情報冊子をもらうなど、施設情報を集め、地図で確認しながら、施設見学や子育て支援を利用するなかで、母親同士の情報も参考に希望園を絞り、

申し込みを行う流れがある。

また、母子手帳配布時や定期健康診断時に配布されたチラシで、生活圏内にある児童館、図書館、社会福祉センター、子育て支援センターを知り利用するなかで、保護者間の交流ができ、施設情報を得てさらに調べ、施設選択につながる場合もある。

・家族から情報提供がある場合、近所の評判を聞いて来るなど、保護者よりも先に施設一覧や子育て支援センターの情報を入手し、それに促されて保護者が動くケースもある。また、保護者の体調不良を心配し、子どもを預けることについて市役所に相談するなかで、入所申し込みにつながるケースもある。

・第2子出産に伴う支援の必要性など、親の介護の問題など家庭の事情で家族の手伝いを受けることが難しく、相談のため市役所を訪れ、ホームヘルパーなどの公的支援情報を受けるなかで、第1子の保育施設や保育サービス情報についても同時に入手することもある。

・保護者の同級生や習い事等で知り合った人の情報から、施設見学や子育て支援等を利用し、施設を選択し、申し込みにつながることもある。

・転勤で越してきたばかりで、親同志の交流もなく、地域の情報が入りにくい場合、ネット情報を頼りに、施設に連絡を取り見学し、説明会に出席し、申し込みする、という流れもある。

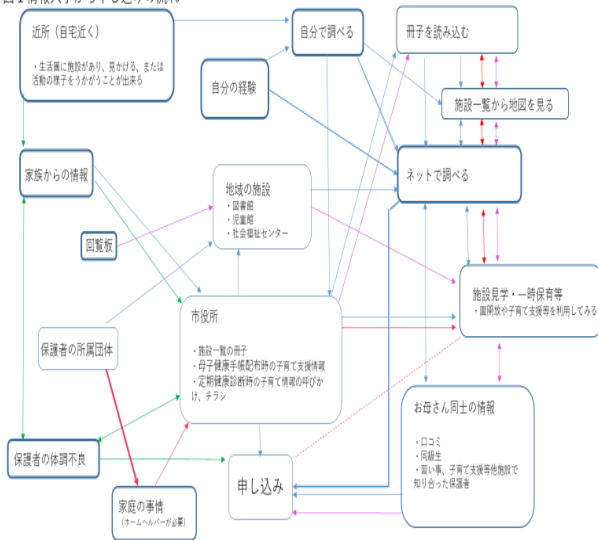
(2) インタビューの考察

保護者 10 名のインタビューから、施設情報をどこから入手したかについては、それぞれの家族が置かれた環境と取り巻く人間関係により異なることがわかる。施設が近所にあたり、よく利用する地域機関が近くにいたり、そこから情報を得たり、近くに住む家族から情報提供を受けたり、市役所を訪ねたり、地域の回覧板を見たり、母子手帳配布時や定期健康診断時に配布されたチラシから情報を入手したり、友人との会話から情報を得たり、自身で調べたり、インターネット情報だけを頼りに情報を収集している場合もあった。こうして得た情報を基に施設について考えを進めるなかで、一番信頼できる情報は何か、という問いについては、9名が実際に施設に出向いて自分の目で確認し、施設の職員と話したり、実際に通わせている人の話を聞くことを挙げている。残り1名についても、役立つ情報のなかで、施設に聞き行く、ということ挙げていることから、自分の

目で確認し、実際利用している人の話を聞く、ということが確かな情報であると感じていることがわかる。

教. 施設	どこから情報を入手し、何を頼りに選択するか(インタビューから抜粋)	施設入所中・・・ABC これから入所予定・・・DEFGHIJ				
期間	施設情報はどこから入手したか	どうしてこの方法で入手したか	一番信頼できる情報は何か	一番役立つ情報は何か	何を頼りに選択するか	二番目の決め手は
A	全部ネットで	夫がネットで調べてくれた	直に見に行くことを行っている人の話をきくこと	ネット	キリスト教教育 送迎バス	英語教育 モンテッソーリ教育
B	回覧板 ママたちの口コミ 周囲の人から	子育てサロンで情報を入手し、ママたちの口コミを参考に入所させた。いざを被る	実際に連れて行って、先生たちの様子を見る	ネット、口コミ	近かった	最後の一枚
C	自分で調べる	保育所の手引きと自分でネットで調べるしかない	公式サイトページを見る	施設に連れて行く、ママたちの情報交換	近い認可保育所	先生の雰囲気
D	近所だったので	生活圏だったので	実際に通わせている人の話を聞く	通わせている人の話と園に電話した時の対応	園庭が広い	施設内がある程度広く、押し込まれている感じがなく
E	友人から	子育て支援で知りあった友人から	実際に通わせている人の情報	子育てサークルの一覧	体験内容と活動の多さ	手作り給食
F	市の子育て支援課で	途中入所の相談に担当課を訪れて	自分の目で施設を見る	保育施設一覧の冊子	園庭の広さ、先生の雰囲気	実家に近い
G	近所にある社会福祉センター	夫と出会った結婚相談所が入っているから	実際に連れて行って見て確認する	ネット	どんなことを教えているか	どんな遊びをしているか
H	市役所とインターネットと教会	第1子出産時の第1子の産後や産院側の支援の相談に市役所を訪れたから	自分の目で施設を確認する	実際に通わせている人の話を聞く	キリスト教系の施設	保育料、雰囲気
I	母子手帳をもらった時のチラシに入っていた	チラシに入っていた、パパママセミナーに参加して参加者と地図で施設見学をした	実際に連れて行って目で確認する	パパママセミナーでもあった子育てサロンのチラシ	園の方針がのびのびしている	近い給食、保育料
J	義理の母から 健康診断時に	義理の母が園長だったから	施設に電話したり、行ってみたい	園長の母が市役所からもらってきた保育施設の情報	近い	保育料

図1 情報入手から申し込みの流れ



情報入手の取っ掛かりは多様であるが、得た情報から行政が出している施設一覧を入手したり、子育て支援について知り、支援サービス利用や施設見学へとつながることがわかる。そこで保護者同士のつながりができ、情報交換によって保育内容や先生の対応等の情報を得て希望する施設を選別していく過程が見える。ただ、今回のインタビューのなかで引越後間もない1名については、知り合いがなく、支援センターや関係機関に出向く移動手段が限られていることから、ネットからのみの情報入手となり、目星をつけた施設を見学後、説明会を経て申し込みを行っている。

また、保護者は情報を得て自分に合ったよい施設を選択していくなかで、何に魅力を感じ、何を決め手に決断するのか、ということについては、実際に行かせている人の評判が悪くなければ、やはり自宅から近い、といった利便性をあげる人が半数あった。その内3名については、既に就労中であつたり、職場復帰の予定が立っている保護者である。また、園庭の広さや活動内容、園の方針や先生の雰囲気、保育料金、キリスト教保育についてあげる保護者もそれぞれ複数おり、英語教育やモンテッソーリ教育、送迎バス、手作り給食に魅力を感じたという保護者もあつた。

(3) まとめと今後の課題

インタビューの結果から、協力者の全保護者が情報入手のためにインターネットを利用していることがわかった。また、居住地に関係なく認定こども園等の多様な施設選択があること、各施設が実施する保育サービスの内容が一樣でないことな

どを認知されていないことがわかった。七木田ほか(2006)による「幼稚園・保育所を利用する保護者の幼保一体化施設に対する意識に関する調査」において、一体化に関する情報が行きわたっておらず、利用者に対する十分な情報提供や議論のための知識の供給が望まれる、とある。劉楠(2015)によれば、いまだ認定こども園について詳しく知っている人は少なく、多様な選択肢があることを認識していない社会階層、またできない階層は、不利な選択をせざるを得ない可能性が高いとされている。認定こども園制度がスタートして10年が経とうとしているが、行政側から発信される情報は十分保護者に届いているとは言い難い。また、保護者側もどのように動いたら良いのかさえわからないまま、保育時間や自宅からの距離といった利便性で入所に至るケースが見られる。多様化した施設形態や事業内容、特色ある保育内容から、保護者が子どもの保育施設選択について、どのようなこだわりを持って、主体的に動いていくのか、その過程を探りたいと考えていたが、施設形態の違いは、これまでどおり幼稚園と保育所のみと思っている保護者もおり、施設による生活の違いについては意識に上らないまま選択されることが起きている。保護者同士の情報交換により行事内容や特別プログラムについては多少話題に上るものの、各施設が実施する保育サービスの内容が一樣ではないことを認知せず、必要な情報入手できないまま選択していることがわかった。地理的環境での施設の設置状況と、建物の新旧、園庭の広さに目をやることはあっても、施設内で繰り広げられる子どもたちの生活については、おむねどこも変わらないと思っている保護者がいる。保育施設の実態を把握できていないことが、保育施設選択時に子どもの育ちを重ねることができず、こだわりをもてない要因の一つと考えられる。このインタビューをとおして、保護者が置かれた生活環境の多様さと、それに伴う一人ひとりの情報量の違い、各家庭が求める必要な情報内容の違いに対する十分な情報把握の難しさを感じた。役立つ情報としてネット利用を上げ、自分なりに情報を得ようとするものの、発信される保育情報は多様で、人によりその閲覧内容や理解度も異なる。ネットで書かれていることが、どういうことを言っているのか分からず、役所に問い合わせるにも、時間内に訪ねたり、電話をかけることは、就労中や子育て中の保護者にとっては負担となる。

また、近くに親族がいる場合、友人・知人のネットワークがある場合など、その家族が置かれた環境により、ネット以外からの情報源もあり、周りの人に施設選択が影響されることも多い。保育施設入所を願う保護者がみな一律の認知度からスタートするわけではない。保護者の持つ情報量は人によりまちまちで、必要を感じて求める内容にも違いがある。たとえ同じ情報が発信されたとしても、そこにたどりつき選択に役立てる人と、関心を持たない人、得られた情報を仲間と共有する人もいれば、子育てサロン等には参加しない人もいる。転勤族で、知らない土地でネットを頼りに情報収集を開始する人もいる。自身の体調不良や、親の介護の問題、出産時のサポートの必要性から行政窓口につながる人もいる。数少ないインタビュー結果からも、保護者がおかれた状況やそれぞれの性格による動きは実に多様である。何か一つの情報で、全ての家庭が子どもにとっても、保護者にとっても有益となる情報にたどり着くわけではない。母子手帳配布時に保育施設に関する資料が配布されることを望む一方で、出産前は無事に生まれることだけを願い、保育施設情報には関心が向かない、といった声もある。行政から配布された冊子、回覧板での案内、子育てサロンでの母親からの情報を頼りに、ネットで確認し、口コミサイトに目を通し、気になる園の見学や、開催される支援センターに積極的に足を運ぶ人もある。信頼できる情報として、実際に施設に通わせている人の話を聞く、というものが上がったが、積極的に自分から動かない人は、話を聞ける人にたどり着けない場合もある。保育施設入所時になって急ぎ情報を得るということではなく、日常の生活圏のなかで、子育てに関心を持ち、我が子をどう育てていきたいか、イメージできる情報に身近に触れられる社会環境が求められている。駅の構内やスーパーに掲示板やコンシェルジュが配置されることで、母親以外の家族も情報を得やすくなる。また、地域の産婦人科や小児科など、子育て家庭が必ず利用する施設の待ち時間を利用して情報を得たいとする意見もあった。土地勘のない転勤族にとっては、就職説明会のように施設が一同に会した催し物に参加することで、気になる施設を探しやすくなり、職員の説明を受けることで、保育施設の特徴や雰囲気を感じ、その後見学に行く施

設を絞ることができる、という意見もあった。

厚生労働省の「保活」の実態に関する調査結果では、情報収集は保護者の苦労・負担を感じさせるもので、この負担感軽減のため、初期段階からの支援とより多い「保活」の情報提供が求められている。子育てに関する広報活動では、対象を子育て家庭に限らず、日常生活のなかで、誰もが自然に子育てに関する基本的な情報をキャッチできる社会全体の取り組みが必要であると考えられる。また、保護者は与えられる情報、発信される情報を待つばかりでなく、それぞれの置かれた状況のなかで、子どもの育ちにとって、保護者にとって、最善の選択につながるために、自身が主体的に動きたくするような子育て観を持つ必要がある。信頼できる情報として、実際に施設に行き、目で見て確認し、通わせている人の話を聞く、ということも挙げながらも、何にこだわりを持って確認しているのかがよく見えてこない。施設見学は限られた時間でどこもみな同じように見えた、というのではなく、我が子がどのような子どもに育てほしいのか、そのためには幼児期を過ごす施設はどうあってほしいのか、ということに意識を留め、子どもの生活の場となる保育施設での成長をイメージすることが求められる。子育て観を持っている人と、はっきり意識できない人、ネット情報や保護者同士の情報交換にながされる人もいる。自分はどうしたいのか、何を望んでいるのか、保護者が描く子育て観が、どのような情報を選び、施設選択に影響しているのか、その関係性を探ることを今後の課題としたい。

引用文献

- [1]堤 孝晃, 2014 「どのような家族が保育所／幼稚園を利用するのか」2015 「2015 年度参加者公募型二次分析研究「子育て支援と家族の選択」七木田敦, 2006 「幼稚園・保育所を利用する保護者の幼保一体化施設に対する意識に関する研究」
- [2]劉楠, 2015 「認定こども園の認知度と規定要因」
- [3]厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 保育課「保活」の実態に関する調査の結果, 2016.5.20 公表及び 2016.7.28 公表